
魔法使いのお仕事

ホムンクルス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いのお仕事

【NZコード】

N4449D

【作者名】

ホムンクルス

【あらすじ】

魔法使い そんな人間に憧れていた子供のころ。だが、魔法使いの現実はそんなに甘いものではなかった。誰が見ても普通の高校生、三船純也はそんな魔法使いの1人であった

プロローグ

「純也。お前は魔法使いなんだ」

僕の6歳の誕生日、父の三船啓一は言った。

前日の夜から楽しみにしていた、クリームたっぷりのイチゴショートケーキを口に運ぼうとした矢先のことだった。

父のそのときの顔はひどいものだった。目に涙を浮かべ、足は震えている。

しかし、そのころの僕では魔法使いに課せられた役目や、その役目の厳しさを何も知らなかつた。知らないのはあたりまえなのだが・

「何でそんなに悲しそうな顔をするの？ 魔法使いつてなんかカッ」「いいじゃん！」

魔法使い 子供のころの僕にとつてはかなり魅力的な言葉だったのだろう。いや、僕だけでは無いはずだ。誰にだって未知の力への憧れはある。

「そうだな、お父さんがこんなことじやいけないな。よし純也、明日から魔法をみつちり教えてやるからな！」

「ごじ」じと目に溜まっていた涙を服でふき取る。

しかし、一向にその涙は止まらない。恐れているのだ。子供が戦いへとその身を投じていかなければならぬことを知つていたから

……

*

「疲れたなあ……」

公園のベンチで倒れこむ。

時刻は夜の11時を回ったところ。

父に自分が魔法だと告げられたのが6歳のとき。9歳までは必死に魔法を覚えたり、身体能力を高めたりした。

実際にこの魔法使いとしての仕事をはじめたのはその翌年10歳からだ。

労働なんちゃら法とかに違反しそうだが、国も魔法使いの多少の法律違反は黙認しているのが現実だ。反対している政治家もいるようだが、魔法使いの存在 자체がトップシークレットのため、そんなに大きな問題とはなりえない。

「そろそろ帰るかな……」

公園のベンチから立ち上がる。

明日は高校の入学式。登校初日から遅刻なんて洒落にならない。しかし、世の中はそんなに甘くは無かつた。

隣町の方から轟音がした。同時に地面が大きく揺れる。こんな状況なのだが、魔法使いではない人間はなぜ魔法使い絡みの物事にはまったく反応しない。

いや、気付かないようになつてているのだ。理由は未だにはつきりとは分からぬが、奴らが狙つてているのは魔力を持つている魔法使いだから……という説が最も有力である。

音に続くように今度は火の手が上がる。これだけ大変なことになつてゐるのに一般人はまったく気付かないというのはやつぱり不思議だ。おまけに、必ず一般人から死傷者はでないらしい。

「まだまだ帰れないみたい……」

ため息をつきながら固まつてしまつた体を伸ばす。

「じゃあ、行きますか！」

僕の周りに風が巻き起こる。それに乗るよう体が宙へと浮かんでいく。

これは飛行魔法。魔法の中では初歩の初歩とされている。

しかし、悔つてはいけない。この魔法がうまく使えない=死、な

んてよく魔法の世界では言われている。それほど僕たちが戦う相手には機動性が重要となるのだ。

僕たち魔法使いが戦う相手
それは魔物だ。

「あれは……魔法使いか？」

黒いローブを纏つた魔法使いが犬のような首が3つある魔物俗にいうケルベロスって奴と戦っていた。しかも、僕が明日から通う予定の三坂学園の運動場でだ。すでに校舎からは火の手が上がっている。

「ぐおおおおお！」

ケルベロスの咆哮こだまが木靈する。それと同時に黒いローブを纏つた魔法使いに火を吹く。その魔法使いは冷静に障壁を張るが、あんな魔力の込められていない障壁じゃ破られてしまつのが落ちだらう。

「このままほつとくわけにもいかないな……」

一気にケルベロスへと近づく。まだあの魔法使いの障壁は耐えているが、すでにひびが入りだしている。

「来い！ インスタイルブレード！」

僕の右手に剣が現れる。これはインスタイルブレード。色々いわくつきの剣だと言っているが、僕はそれがなんだかは知らない。

「閃光……翔破！」

インスタイルブレードから光が放たれる。その光はケルベロスが吐いた炎を相殺した。

「だつ、誰ですか！」

謎の魔法使いが叫ぶ。

酷い言い草だ。助けてあげたのに、僕のことまで警戒しているよう見える。

「君は早く逃げて！ こいつは僕が倒すから」

しかし、魔法使いは動かない。逆にこっちを睨んできている。

「あなたは何者ですか？」

「通りすがりの魔法使いだ！」

そう答えてケルベロスとの距離をさらに縮める。炎を吐こうとす

るがもう遅い。すでに剣の届く範囲に入り込んでいる。

だが、ケルベロスもそこでやられるほど甘くは無かつた。炎が間に合わないと感ずいたのか、大きく後ろにバックステップして、僕との距離をとった。そして、また炎を吐こうとする。

「馬鹿の1つ覚えだな……これでもくらえ！」

光の矢を何万個と作り出す。1発1発の威力は無いが、塵も積もれば山となり これだけの量をくらえばかなりのダメージになるはずだ。

光の矢がケルベロスの周りに展開する。全方向からの一斉射撃で倒してしまおうという作戦だ。さつきまで僕のことを睨んでいた魔法使いも今は静かになっている。ちょっとは僕のことを信用し始めたのだろうか。

「行けっ！」

僕の声の合図と共に、あたりに展開していた光の矢が一斉にケルベロスへと動き始める。あとは簡単だ。案の定ケルベロスは成す術なく光の矢の直撃を受けている。その弱つたところに一撃を叩き込めばそれで終わりだ。

「はあああ！」

剣が風を切る音を発する。それからケルベロスの首が飛ぶまでの時間はかからなかつた。

首が飛ぶ といつても、そんなにグロテスクなものではない。実際に血が飛び出るところなんて見えないし、まして死体がそのまま残つたりもしない。要は、勝手に消えてなくなるのだ。どういう仕組みかは知らないが、昔からこうなのでこういうものなのだろう。

「ふう。早く帰つて寝なきやな……」

ボソッとひとり言を呟く。

「あのーさつきは疑つたりしてすみません」

忘れてた……そういうば謎の魔法使いがいたんだつた。それに、理由は存じ上げないがやつぱり僕のことを疑つていたらしい。

「いや、別にかまわないけど……怪我は無い?」

「あつ、はい。おかげさまで……」

顔を赤くして小さい声で言つ。魔力の使いすぎで顔が赤くなつてるのだろうか? たまに魔力の使いすぎで体に何らかの影響が出ることはあるが、顔が赤くなる なんて今まで僕はなつたことが無い。なつたといえば、1日中動けなかつたり、全身筋肉痛や体の氣だるさなどだつ。

「じゃあ僕は帰るから」

飛行魔法で帰るために風を身に纏う。

「せめてお名前を聞かせてください！」

「ん？ 僕は三船純也だよ」

そう告げて空へと舞い上がる。まだあの魔法使いは何か話したそ
うな顔をしていたが、名前以上は言つわけにはいかない。あまり僕
の過去を探られたくないから・・・

「またよかつたら会いましょうー！」

学校から大きな声がする。

確かにまた会うかもしれない。ここで戦つていたということはこ
の付近に住んでいることには違いないだろう。それに、顔はよく見
れなかつたが、チラツと見た限りでは、僕と同年代っぽい顔立ちだ
った。おまけにかなりの美人だった気がする。まさか学校が同じに
なるとは思えないが、あれだけの美人ならそのうち噂にでもなるだ
らう。僕の見間違いでなければだけど。

「起きろー。起きろー！ 起きろー！」

軽快なりズムで響く声。この声は人間ではない。僕の家に置いてある目覚し時計だ。去年の誕生日、友達から貰つたものだ。有効に活用させてもらつている。

「ふわあー」

ベットから出て、あぐびと共に大きく体を伸ばす。さすがに少し寝不足だ。結局、風呂に入つたりなんやかんやで、寝たのは2時を過ぎてしまった。

時刻は7時30分。8時30分までには登校しないといけないのでは、あまりのんびりしている時間は無い。

まだ寝たい衝動を押さえ込み、新品の制服をクローゼットから取り出す。僕が通う三坂高校は、なんとか教の学校なので、肩に、十字架のステッヂがあつたりする。だが、僕はこんな宗教は信仰してはいない。それに、この学校自体、そんな風習は消えてきている。強いて言えば月に1回あるお祈りの時間くらいだろ？。パンフレットにその様子も書いてあつた。

こんな中途半端な宗教学校だが、いいところもある。私学の割に、授業料がとんでもなく安いのだ。その辺の公立高校とも大差は無いだろう。ちなみに、僕がこの学校に入ったのもそれが理由だ。友達からの誘いも無かつたと言えば嘘になるが……

「よし、そろそろ行くか！」

朝ご飯も食べ、かばんも持つた。ちなみに両親はお金を置いて旅に出てしまった。どうせ魔法使い絡みの事だとは思うが、ここ数ヶ月連絡が無い。僕も一緒に来るかと誘われたが、まだこの町でやり残したことがあるから、まだここを離れるわけにはいかないのだ。ドアを開け、外へと飛び出す。太陽が眩しい。さっきの辛氣臭い考えも吹き飛んでしまった。

「おっはよう純也！」

後ろから同じ制服を着た男が走ってきた。

「おはよう亮」

この男の名前は葛城亮。^{かつらぎりょう}どこかのお坊ちゃんらしいが、そんなことは感じさせない結構いいやつである。茶髪に整った顔立ち。もてそうだが、いくつか欠点がある。とにかく、可愛い女の子には目がないのだ。よくナンパして、玉砕している姿を中学の時田にした。女性には一切妥協しないのが生涯のテーマだそうだ。そうやっていつも女性に対する持論をを延々と語られたこともある。

「おい純也。同じ学年に西中からとびっきりの美人が来るらしいぜ！」

また始まった。ちなみに僕と亮は東中で、西中の人たちとはあまり面識が無い。それに、西中に通つてゐる人たちは、お金持ちは多く、どうも近寄りがたい感じがする。

おもむろに亮がポケットから何かを取り出す。これは「写真だ。しかも、女の子の。どこかで見たことのあるような顔だが、気のせいだらう。

「どうだ純也。かなりの美人だろ？」

「うん。これがその西中の子？」

「ああ。名前は三枝奏。^{さんきくさかな}俺以上のかなりのお嬢様だという噂だ」たしかに。お嬢様っぽい雰囲気を待つてゐる気がする。透き通る

ような肌。屈託の無い笑顔。指通りのよさをそつと長い黒髪。しかし、どこかお上品な風格を漂わしている。こういうのを現代の大和撫子とでも言つたのだろうか。天地がひっくり返つても亮とはそういう関係にはなれそうに無い人間だ。もちろん僕とは関りを持つことさえありえないだろう。

「よし！ 僕は今日からこの子にアタックするぞ！」

拳を空高く突き上げ、声高らかに宣言する。さて、僕はいつも通り振られたときに慰める準備でもしておこう・・・

学校へ向かう坂道を歩いていると、女の一人組がたくさんの中声をかけられていた。非常に迷惑そうだが、厄介」とは」めんなので、見てみぬ振りをして、学校に向かおうとする。だが、亮は違つた。おもむろにその人ばかりへと歩みを進めていく。どうやらあれを止めに行くらしい。そういえば、いつか亮が言つてた気がする。「ナンパされている女の子を助けると、そこから恋愛に発展する可能性はかなり高いぞ！」

これも、亮の持論の中の一つらしい。よくこれは実行していたが、逆にナンパしていた男どもに返り討ちにされていることもしばしばあつた。

「その子嫌がつてゐからそろそろやめてあげたら？」

おっ、いつもと違つてクールな声のかけ方だ。今までは、無理やり止めようとして、返り討ちにあつていたから、これは亮なりの學習なのだろう。

「なんだお前は！」

「邪魔すんなよ！」

やばい、険悪なムードになつてきた。こういうときの尻拭いは決まって僕がすることになるのだ。

「だから、この子が嫌がつてゐからこのくらいに・・・」

そこで亮の声は止まつた。見事に男の右フックが亮の顔にクリーンヒットしている。あれは痛いだろう。打たれ強い亮でも、かなり効いているはずだ。

「そろそろ止めないとまずいかな・・・」

僕も人ごみに向かつて走り出す。

なるほど。こんなに男どもがやつきになつて口説いている理由が分かつた。口説かれていた女の子の1人は三枝奏だった。横にいる女的人は知らないが、この人もまあまあ可愛かつたりする。

「大丈夫か？ 亮？」

「すまん純也。もう俺はだめみたいだ・・・」

ガクツとアスファルトに倒れる亮。この行動は相変わらずだ。まだ動けるくせに、全部僕に押し付けて気絶した振りをしているのだ。「んじゃ、そういうことなので」

亮を引っ張つて学校への道のりを歩き出そうとする。一瞬男どもも、三枝奏たちも睡然とするが、男どもは簡単には行かせてくれなかつた。

「逃がすと思つてんのか！」

男どもの中でもボス、といった感じの筋肉質の男が僕に殴りかかつてくる。だが、いつも魔物と戦つている僕に、ただの人間のパンチなんて通用するはずが無い。

首を傾けるだけで、その男のパンチをかわし、がら空きになつた腹部に蹴りを入れる。鈍い音と共に、その男は悶絶し、アスファルトに倒れこむ。少しやりすぎたらしい。口から泡を吹いている気がしないでもない。だが、この男がやられたことに焦つたのか、あれだけいた男どもは、気がつけば誰もいなくなつっていた。

「亮……早く起きろ」

僕の声を聞いた瞬間、手を使わずに体を振つた反動だけで起き上がる。まったく、これだけ元気なら、自分で最後までどうにかして欲しい。

「助かつたよ純也。あんな泥臭い喧嘩なんて俺の性分じゃないから純也に任せることにしたんだ。それより君たち……怪我はないかい？」

早速口説きにはいった。今から慰めの言葉よ考えておくのが僕の

最大の仕事だ。

「何であんたがそんなに偉そうなわけ？ そつちの戦つた方の男なら話はわかるけどさ」

三枝奏の横にいる女が言った。どうやらかなりきつい性格のようだ。このくらいなら、別に助ける必要は無かつたのではないだろうか。

「そんな言い方しちゃダメですよ舞ちゃん」

三枝奏が言った。

それより僕は早く学校に行きたい。あまり時間の余裕も無いのに、余計な人助けをしたのだから、かなり時間はないと考えても無理はないだろう。

「いいのよ別に。それよりそこあんた。私の名前は香坂舞。（こうさか まい）あんたは？」

「ん？ 僕？ 僕は三船純也。こっちは葛城亮」

名を名乗った瞬間、香坂舞と三枝奏の顔が驚いたような表情になる。僕はこの2人と面識がないので、亮と何か関りでもあつたのだろうか。だが、肝心の亮は、さっきの香坂舞の言葉が効いたのか、またアスファルトに倒れている。

「また助けてもらいましたね！」

亮の様子を見ていると、不意に三枝奏が言った。その顔は、亮が持つていた写真の顔とは比べ物にならないくらい輝いて見える。だが、また助けてもらつたとはどういうことだろう。最近人助けをしたといえば昨日の夜 まさか、いや、そんな気がしてきた。三枝奏。こいつは昨日の魔法使いだ。

「もしかして……昨日の？」

「はい！ 覚えていらっしゃったんですね」

「まあ……」

だが、なぜ香坂舞まで驚いた顔をしたのだろうか。まさかとは思うが、香坂舞も魔法使い

「あつ、私も奏からあなたのことには聞かせてもらつたわ。私もあな

たと同じ種類の人間だから、これからよろしくね
だつたようだ。

「私の名前は三枝奏です。よろしくお願ひしますね純也くん！」

「あっ、うん。よろしく三枝さん」

すつと、三枝の人差し指が僕の口の前まできた。

「奏つて呼んでください」

「じゃあ奏さん」

しかし、三枝は……いや、奏は許してはくれなかつた。さつきの笑顔とは打つて変わつて、少し真剣な顔になる。

「奏です！」

どうやら、認めるまでは、話が進みそうにない。いいかげん回りの目も気になつてきた。

「わかった。奏つて呼ぶよ」

そういうた瞬間、奏の顔は喜びでいっぱいになる。そんなに名前で呼ばれるのが嬉しいのだろうか。名字で呼ばれると、堅苦しい感じがして嫌だからなのかな？

「私も舞でいいわよ。奏のお気に入りみたいだしね。でも、男で奏の名前呼ぶの純也が始めてよ」

どうやら、僕は奏のお気に入りらしい。命を救つてもらつたお礼も入つているのだろう。そうでなければ、こんなシチュエーションにはなり得ないはずだ。たまには人助けもしておくものだな……

「さて、俺は何組なのかな?」

学校に着くや否や、クラス分けが掲示されているところへ亮は走つていった。そういうえば、中学校を卒業したときから、高校のクラスのことを気にしていた記憶がある。それほど亮にとってクラスのメンバーというの大事なんだろう。

「純也君。ちょっとお話を……」

掲示板に向かつて走つて行つた亮の姿を見ると、即座に奏が声をかけてきた。亮が居ては言えないことといえば、おそらく魔法使いや魔物の話なんだろう。

「ん? どうしたの?」

「今日、良かつたら私の家に来ませんか?」

えつとー。これはどういう状況なのだろうか。奏が僕を家に招待する? そんなどこかのゲームみたいな話があるはずが無い。方や、超が付くほどのお嬢様。もう一方はただのちょっと魔法が使える庶民。そんな敷居が高そうなところに僕が行けるはずが無い。うん。これはきっと僕の聞き間違いだろう。

「ごめん。もう一回言つて?」

「えっと、今日学校が終わつたら、私の家にきて欲しいんです……」

どうやら聞き間違いでは無いらしい。なぜ、僕を招待するのか理由を聞きたいところだったが、奏はすでに僕の視界から消えていた。言うだけ言つてどこかに行つてしまつたらしい。目の前には舞しかいない。

断ろうかな……と一瞬思つたりもしたが、舞の目を見ると断つたら殺すというオーラがひしひしと伝わってきた。とりあえず行くことにしておいたほうが安全な気がしてきた。それに、いくら奏の家がお金持ちだからといって、ちょっと無礼を働いたぐらいで、一家丸ごと社会的に抹殺なんてことはなら無いだろう。こうなつ

たら、あとは野となれ山となれ……だ。

「わかつた。でも、奏の家つてどこにあるんだ？」

舞が僕の言葉を聞いた瞬間、大きくため息をついた。何か僕は悪いことを言つたのだろうか。心当たりはまったく無いのだが、……「純也。あんたもしかして奏の名字聞いて何も思わなかつたの？」ぐつと僕の顔を睨んでくる。

確か、奏の名字は三枝 ん？ 三枝だつて？

「思い出した！」

三枝といえば、この付近一帯の土地をもつてている大地主で、かつ、世界的に有名な三枝コンツェルンの創業者の名前じゃないか。この辺に住んでると噂は耳にしたことがあつたが、それが本当の話だとはこれっぽっちも信じてはいなかつた。

確か、その噂話によれば、この学校から西の方角に見える山の森の中にとんでもない豪邸があるらしい。セキュリティーは世界一で、侵入者は容赦なく射殺 と誰かが言つていた。これはあくまでも噂話だ。あまり信じたくは無い。特に後半部分は……

「でも、純也は奏の家初めてなんでしょ。じゃあ私たちと一緒に行かなきゃ S.P に魔法で襲われるかもしれないわね。だから、勝手に1人で行こうなんて考えちゃダメよ」

そう言つて、奏を探しにどこかへ歩いていった。

どうやら噂はまだましだつたようだ。魔法使いの S.P とは、恐ろしいところだな……だから金持ちはどこか苦手なのだ。必ず何かが普通ではない。そんなこと考へてる僕も魔法使いなので普通ではないのだが……

「おい純也！ お前も俺と同じ A 組だぜー。三枝さんやあの香坂舞とかいう女も一緒だ！」

掲示板に集まっていた人ごみから亮が抜け出してきた。「苦労なことだ。つまく扱えればきっといいパシリとして活躍することができるだろ。」

それにしても、これは誰かの陰謀なのだろうか。よりによつて奏

と舞の魔法使い二人組と同じクラスになるなんて……

僕たちも人の流れに任せて教室への道を歩き出した。今年は例年に比べると、かなり新入生が多いらしい。廊下はすでに人であふれかえっている。

「ここで1年間生活するんだな……」

1年A組の前で亮がさやくように言った。亮にしては眞面目な台詞だろ？ だが、今から始まる学校生活を妄想しているのかすでにその顔にはちょっと気持ち悪い笑みを浮かべている。

さて、黒板には座席表が張り出されてあつた。どうやら出席番号順に座らなければいけないらしい。僕の名前は三船なので、かなり最後の方となる。幸運なことに、僕よりも後ろの出席番号の人は少なく、前から2番目の窓際の席をゲットすることに成功した。

しばらく外を見てボーッとしていると、ドアが開く音と共に、熱血教師といつた風格を漂わせた男が入ってきた。髪の毛は角刈りで、かなり筋肉質。片手には竹刀が握られている。

「よし！ お前ら席につけ！」

竹刀を持った熱血教師が言った。今時、竹刀なんて持つてる教師なんてこの人だけだろ？ 天然記念物ものだ。申請すればきっと一発で通る気がする。

もちろん、そんな教師を見て教室内はざわつく。亮もその中の一人だ。だが、いつまでもその熱血教師らしき人が、ざわついている様子を見逃すわけが無かった。

腹の中まで響くようなを出して、黒板を竹刀で殴りつける。若干黒板にひびが入っているような気がするが、それは気にしないでおこう。

「黙つて席につけ！ この竹刀の餚になりたいか！」

さすがにクラス中が静かになった。その瞬間立ち歩いていた生徒がいそいそと席につき始める。

生徒全員が席についたのを見ると、感心した表情で僕たちの顔を見回す。そして、何度もうなずいたあと、竹刀を壁に立てかけ、黒

板に名前を書いた。竜里勝一郎。りゅうり かついいちろうなかなかの達筆だ。

「俺の名前は竜里勝一郎。28歳独身だ。よろしく頼む」

教室中が変な空氣に包まれる。あらかた28歳という年に驚いているのだろう。僕だって例外ではない。ぱっと見、30歳以上……下手したら35、いや40でもいけるのではないだろうか。そのぐらい老けているのだ。独身だという理由もなんとなく分かる。

ふと右を見てみると、入り口側の端から2番目^田の前から3列目^田にいる亮が目に入った。必死に笑いをこらえている。他にもそんな様子の人はいたが、亮が1番酷いだろう。

そのとき、先生の目が光ったような気がした。目にも留まらぬ速さで手に握られていたチョークを投げる。そのチョークは一直線に亮へと向かっている。肝心の亮は下を向いて笑いをこらえているため、まったくといって気付いていない。うん。死んだな。

鈍い音と共にチョークが亮の頭へとめり込む。おでこではない。脳天だ。そして、クラス中の哀れみの目の中、亮は沈んだ。声をあげるひまも無く……

「俺のことを笑った奴はこうなるからよく覚えておけ」

ふん。と竹刀を肩に担ぐ。この瞬間、たつた登校1日目でクラス全員の心の中がシンクロしたと思つ。こいつには逆らわないでおこう と。

*

恒例の自己紹介をした後、入学式のため、体育館に入ることとなつた。

自己紹介のとき、1人だけ奏と舞以外に魔力を持った人間がいる

ことに気付いた。あっちも僕が魔法使いであることに気付いたみたいで、やたらと魔法を使って誰にも気付かれずに会話する方法念話を僕に使つてきた。もちろん完全に無視してやつたが。

名前は伏見千佳。伏見 といえば、かなり魔法界でも強力な魔法使いが居る一族で、イギリスのロンドンにある世界中の魔法使いを統率している組織のお偉いさんもいるらしい。だが、実際その組織の言う通りに活動している魔法使いは一握りで、実際は在つて無いようなものだ。この組織の言う通り行動したほうがお金にはなるのだが、戦闘報告などを義務付けられるため嫌な人が多いようだ。僕もその中の一人だつたりする。

「なあ純也。あの伏見千佳って子もなかなか可愛くないか？ 三枝さんは綺麗つて感じだけど、あの伏見つて子は可愛いってかんじだよなあ……それにあのピンク色のツインテールがそそるぜ！」

ぐつと握り拳を作つて亮が言う。廊下でそんな大声で語らないで欲しい。こいつと友達で居るのが嫌になつてきた。

だが、亮の言つこともあながち間違いではないだろ。黒髪でジヤパニーズビューティーといった感じの奏とは違い、千佳は小動物的な雰囲気がある。背は奏よりは小さいが、出るとこはしつかり出ていたりする。奏と比べてもそこは同等だろ。ちなみに舞はあまり出ていない。言つたら殺されそうだが……

「ねえねえねえ！ 無視しないでよ！」

頭に声が響く。これが念話だ。もちろん仕掛けてきてるのは千佳。頭が痛くなるほど叫んでいるが、ここで負けるわけにはいかない。歯を食いしばつて必死に耐える。残念ながら、この手の補助魔法を回避する術を僕は持つていない。基本的に攻撃魔法や身体強化魔法、あとは移動に使う魔法しか覚えていないため、この念話を聞き続けるしかないのだ。返事をすればすむ話だが、実は伏見千佳とは小さいころに面識がある。かなりわがまだつた記憶があり、一度こう決めたら絶対に譲らないといったタイプの人間だ。よつて、千佳と会話すると面倒なことになりかねないので無視することに決定した。

「ほら。昔いつしょに遊んだでしょ！ 公園で鬼ごっこしたりブランコに乗つたりしたじゃん！」

何がいつしょに遊んだだ。遊んだといつても、鬼ごっこでは僕が永遠に鬼、ブランコでは押してあげるとか言って1回転させられたこともあつた。もちろん魔法を使ってだが……

「それに……いつしょにお風呂にも入つたじゃない……初めて男の人に全部見られたんだから…………」

「おい！ 何言つてんだ！ あの時はまだ7歳でだな…………しまつた！」

「へつへーん。やつと話してくれたね。久しぶり純也。あえて嬉しいよ」

「僕はぜんぜん嬉しくない……」

ついあんな話をされたので反論してしまつた。三船純也、一生の不覚だ。

「それにしても本当に久しぶりだね。私が8歳の時にイギリスに行つたから……」

「7年ぶりぐらいだな」

計算が遅すぎるの、先に言つてやつた。ざまあ見ろだ。ちなみに、千佳は魔法の勉強のためにイギリスに行つたらしい。本場の魔法を勉強しに行つたのだから、さぞかし強くなつていることだろう。余談だが、8歳のころまでは僕のほうが千佳よりも強かつた。千佳自身は認めてはいないうだが。

千佳とこんなくだらない会話をしている間に、体育館へとついた。

体育館は、冷暖房も整備されていて、年がら年中快適な空間でスポーツを楽しむことが出来るらしい。もちろん教室にもあつた。

体育館に先頭の生徒が足を踏み入れた瞬間、吹奏楽部の演奏だろうか、かなり大きな音の音楽が始まつた。クラシックなどにはまったく興味が無いので、この曲が何かは分からぬ。千佳は知つてゐるのか、念話で、第3楽章がどうたらと言つていたがスルーしておいた。それに、聞いたところで僕に理解できるわけが無い。

次々と体育館の中に入ってくる。今年はE組まで在るらしい、かなり多いみたいだ。ちなみに2年はC組までしかない。

全クラスが並び終わつたところで、校長先生らしきおじさんが舞台へと上がる。髪の毛は白髪だらけで、顎にも白い立派なひげがはえそろつてゐる。そこまでひげを育てるのは大変だつただろう。

「わしはこの学校の校長じや」

お話が始まつたらしい。前置きも何も無い始まり方だつたが、ぐだぐだされるよりはいくらかましだろう。だが、校長の話というのは長いと昔から決まつてゐる。さて、立つたまま寝るか……

「以上」

何名かの生徒がずつこける。どうやらかなり大雑把な校長だつたらしい。教頭と思われる人物が、もうちょっとと話してくださいと頼んでいるが、完全に無視してゐる。

その後、校則などの説明があり、入学式は無事に終了した。

「ねえねえ純也」「

入学式が終わった瞬間、千佳が声をかけてきた。今回は念話ではない。顔と顔を合わせて話している。おかげで亮からの変な視線がこっちに向けられる。

「何かな?」

「私、今日から純也の家の隣に住むから」「

「ちょっと、隣の家って誰か住んでただろ。冗談も休み休み言え
だが、待つてましたと言わんばかりに千佳は胸を張る。

「買い取ったのよ」

「はい?」

「今ものす」く非常識なことが聞こえたような気がする。今は体育館から出て、廊下を歩いてるので、周囲にいた生徒もかなり驚いている。どうやら聞き間違いではないらしい。

「何でそんなこと……」「

「ん? 純也のお隣さんになりたかったからだよ」

「ちょ……周りの視線がかなり痛い。亮にいたっては握りこぶしを作つて今にも殴りかかってきそうだ。」

「それに純也と一緒に仕事もしたいしね」

念話で話しかけてきた。この話は聞かれたらまずいと千佳なりに考えたのだろう。できたらやつとの会話も全部じつじつ風にして欲しかった。

「でも、僕と千佳は一緒に仕事できないんじゃあ……」

千佳は僕と魔物退治する気満々だが、実際問題、現段階ではそれは不可能だろう。

理由は、千佳の両親が幹部として所属している魔法使いの組織魔生物対抗魔法協会、通称、魔対に僕が所属していないからである。千佳は、両親が魔対の幹部なのでもちろん所属している。ここ

が問題なのだ。魔対に所属している者は、所属していない者との一切の魔物、または魔法関係での協力や交流などを禁じられている。情報の漏れなどを防ぐためらしいが、実際はかなり漏れれている。なので、あまり魔対に所属している魔法使いが少ないのも知っているし、最近では、かなり内部で問題が起こっているという噂も聞いた。しかし、千佳はそんなことどこ吹く風、ニコニコと笑つて歩いている。何か手段でもあるのだろうか。

「大丈夫。純也もこれから魔対の幹部だから。もちろん私もだよ」
陽気なソプラノの声が頭に響いた。

「へ？ 僕が魔対の幹部だつて？」

いまいちまだ信じることができない。だつて、今まで魔対に何か協力した覚えも無いし、関わりもさえ持つたことが無いだろう。その僕がいきなり魔対の幹部だ なんて言われても信じるほうが難しいだろう。

「そうだよ。私と純也。仲良く幹部に就任が決定しました！」
「はあ……でもどうして僕が？」

そう聞いた瞬間、若干千佳の表情が曇つた気がした。横に並んで歩いているので、その表情を見ることができた。僕も自分が幹部に選ばれた理由が分かつた気がした。2年前の唯一のまともな生存者。そのことが原因の一つ、いや、大部分を占めているのだろう。

あの時の記憶が脳裏をよぎる。あたり一面人の血痕や亡骸で埋め尽くされていたあの光景。一生忘ることは無いだろう。今でも血を見るとあまりいい気はしない。2年前の話だ。すでに忘れてしまつてるかと自分自身思つていた や、忘れたかったのだろう。あの人の人姿をした魔物のことも、あいつにわざと「生かされた」記憶も全て……

「別に断ることもできるんだよ……」

千佳の声ではつと我に返つた。

さつきの元気な声とは違い、どこか悲しそうな、それでいて苦しそうな声色だ。僕に気を使つていてるのだろうか。もし、そうなのだと

としたら、あまり言い気分はしない。僕はあの死んでいった人たちの思いや願い。それにたつた一人まともに生き残つた僕に対する恨みも、全て背負つて生きていかなければいけないと思つてゐる。だから余計な同情はあまり嬉しくは無い。

「いや、その話請けることにするよ」

魔対はあまり好きではない。しかし、魔対に入つたほうが、いち早く奴の居場所や正体を特定できるかもしれない。仇をとつて死んでいた人たちに償うというわけではない。ただ、僕自身、奴に生かされているこの身が自分のものでは無いような気がするのだ。その感覚を払拭するためにも、奴を殺さなくてはいけない。

「じゃあ、今度の日曜日一緒にロンドンにいこうね！」

「ちょっと待つて、僕もロンドンに行かなくちゃならないの？」

「あたりまえだよ！ 色々手続きとかもあるし……」

まいつた。ロンドンにはあいつがいるじゃないか……そう思うと少し憂鬱になる。だが、要是あいつと顔を合わせなければいいのだ。それで全てはうまくい

「あっ！ 沙希ちゃんには、今念話で日曜日そつと行くなつて連絡しておいたから。とつても嬉しそうだったよ」

かなかつたようだ。

「嬉しそうつて……嫌がつてたの間違いじゃない？」

「まったく……女心が分かつてないなあ純也は」

腕を組んでうんうんと頷いてゐる。念話で話してゐるので、周りから見れば変な行動をとつてゐるようになつて見えるだらう。すでに周りから白い目で見られ始めていた。

僕と千佳が沙希と呼んでゐる人物 それは僕の義理の妹である三船沙希のことである。

沙希と僕はあまり仲が良くないとと思う。千佳は女心がどうこうと言つてゐるが、そんなものかけらも感じることができない。なんていうか、僕に対して冷たいというか、厳しいというか・・・とにかくあまり仲が良くないのだ。別に仲が悪くなりたくてなつたんじや

ない。逆に義理とはいえた兄弟なんだから仲良くしたかったぐらいだ。ちなみに沙希とは同じ年で、母方の連れ子だ。さらに魔法使いでもある。僕を産んだ母は僕を産んでしばらくすると死んでしまったらしい。その後、僕が10歳のときに今の母親である圭子さんと再婚した。僕自身、僕を産んだ母の記憶は無かつたので、反対ではなかった。そのころの沙希はお兄ちゃんと書いて、てくてくと後ろをついて回るような可愛い女の子だったが、13歳ぐらいだったんだろうか、ちょうどあの2年前のことがあつた年なので間違いないだろう。急に冷たくなったのだ。理由はわからないが、謝つても「別に怒つてなんか無い」の一点張りなのだ。

そして、14歳になつたと同時に、ロンドンに両親と行つてしまつた。1年で返つてくる予定らしいので、そろそろ帰つてくることだと思うが、未だに連絡は無い。

両親はロンドンからさらになにかに行つてしまつたらしく、沙希もあつちで1人暮らしをしているとたつた1度だけ手紙がきた。だが、その手紙は5行ぐらいしかかかれておらず、寂しい内容だった。ちなみに僕は月に1回手紙を送つている。僕は念話はあまり得意ではないので、ロンドンなんて遠いところとまづまく念話できないのだ。

「じゃあ今日は一緒にロンドンに行く準備しようか?」

「うん……じゃなくて今日は駄目だ」

どうして? といった感じに首を傾ける千佳。

「いや、秦の家に行く予定で……」

千佳が僕の顔をじっと睨む。何か悪いことをしたのだろうか?

「いつの間に口説いたの? あんなお金持ちと純也がお近づきになれるなんてありえないよ!」

失礼な言い草だ。僕だってその気になればきっと いや、無理だろう。僕は生まれてこのかた彼女なんていう存在は皆無なのだ。亮にはもてると言われたが、実感が無いのでそれは嘘だろう。ちよつと寂しかつたりもするが・・・

「まあいろいろあつたとしか……まあそういうわけだから今日は駄目だから……明日はどう、今日金曜日だしちょうどいいと思うんだけど……」

金曜日に入学式とは変わつてゐたと思つたが、このときばかりは今日入学式であることに感謝だ。千佳の様子を見るに、少し不機嫌そうなので、これで少し気を揉むことができれば幸いなのだが。

「それって……デートのお誘い？」

廊下で盛大にすつ転ぶ。今の会話は誰にも聞かれていないので、周りから見ればただの馬鹿だ。しかし、それを差し引いてまで、今 の言葉は衝撃的だった。

「何でそういうんだよ！」

思わず大きな声で叫ぶ。もちろん念話でだ。千佳も、今の声が頭に響いたのか、頭を抱えている。当然の報いだ。

「うー冗談だつてばー」

「ごめん。ついつい叫んじゃつた」

その後は、他愛ない話をして、気が付けば教室だった。今日は入学式だけなのであとは帰るだけだ。

「おーい純也！一緒に帰ろうぜ！」

「ごめん。今日はこの後用事あるから」

用事とはもちろん奏の家に行くことである。だが、亮には奏の家に行くとは言わない。もし、言つたら俺もついていくと言つて聞かないだろ？

「ちえつ、何だよつれないな。もしかして……女がらみか？」

一瞬、僕の心臓が飛び上がつた気がした。すぐさま動搖を隠し、いたつて冷静な顔をする。亮に悟られないようにするためだ。

「そんなわけ無いだろ。それに僕もてないし」

その言葉が真実か否か確かめるように亮が僕を舐めるように見る。かなり気持ち悪い。

「わかった。じゃあ俺は一人で帰るからな。んじゃ、また月曜日」

ああ。と返事をし、教室を出る亮を見送る。千佳も僕が奏の家に

行くことを知つていいからか、すでに教室からいなくなつていた。

「純也君」

カバンの中に今日配布された教科書をしまっていふと、不意に後ろから声がした。

「奏と……舞か。そつにえ、奏の家まではどうやつて行くんだ？」

あの森の中にあるつて聞いたけど」

窓から見える、馬鹿でかい森を指差す。普通に言つたら絶対に迷う、断言してもいい。

「大丈夫よ。奏の家までは魔法で行くから」

「魔法つて……こんなとこりで使って大丈夫なの？」

「要はばれなきやいいのよ。ばれなきや」

舞はこういつていいが、さすがに奏は反対するだろつと思い、奏を見てみるが、どうしました？ といわんばかりに首を傾げられた。やつぱり金持ちひじこか感覚が麻痺してゐるじこ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4449d/>

魔法使いのお仕事

2010年11月21日10時42分発行